**原爆稲**

**上野さんへのインタビュー　まとめ**

稲垣

**[質問票より～原爆稲について～]**

１どうして原爆稲を育てようと思われたのか

→農業を進める中で、上野さんは多くの種類のイネを育てており、その種類のうちの一つとして原爆稲を育てることにした。原爆稲は九州福岡市のNPO法人「九州アジア記者クラブ」を通してイネを譲り受けた。原爆稲を育て始めて5・6年ほどになる。

２原爆稲を通して、何か心情など変化はあったのか

→どれだけ月日が過ぎても変わることなく稲穂の半分に実がつかない原爆稲を育てていく中で、このイネを通して平和のことはもちろん、農業についても人々に考えてもらいたいと思った。

３原爆稲と普通のイネとの違いは何か、ある場合はその違いから育てるうえでの注意点はあるのか

→育てる環境の違いのみ。原爆稲は元が九州のイネであるため、普通のイネよりも遅く稲穂が出るなどの違いが出る。

→普通のイネと同じ所に植えても問題はない。イネは「自家受粉」のため、他のイネと交配をさせる方が困難である[[1]](#footnote-1)。しかし、可能性がないと言い切れるわけではなく、科学的根拠はなし。万が一に交配してしまった稲があったとしても、そこから急速に広まるというわけではない。

４原爆稲を食べた場合、人害はあるのか

→雑米？(せんべいなどの加工品)として農協へ原爆稲が流通しており、皆知らず知らずのうちに口にしていることもある(それでも被害がないということは、食べても問題はないということではと思われるが、科学的根拠はなし)。

５子どもを含め、原爆稲を通して人々にどういったことを学んでほしいか

→ただ原爆稲を見てもらい、上野さんから「押しつけ」の形で伝えていくのではなく、人々に実際に原爆稲と普通の稲を比較しながら長期で育てていく中で、各自が「顧みる」ことで自ら平和について、食べ物を育てることなどそれぞれが自分の思うように感じ、学んでいってほしい。

**[質問票より～農業・TPPについて～]**

１農業を始めたきっかけは

→元々家系が農家であるため。

２農業を進めている中で得られるもの、苦労することは何か

→ご本人からは聞くことなかったが、自分の田んぼについて説明をしてくださる上野さんはとても笑顔で、稲などを育てること自体に喜びを感じているように思った。また、大きな面積のある農地を一人で管理している肉体的な苦労があると思う。

３TPPについて思うことは

→現在はご飯一杯分の価格が100円であるが、TPPに参加すると10，20円になってしまし兼業でさえ農業を続けられなくなる可能性が高い。そうしたリスクを負うくらいならば、自分の家族分のみを生産することにして農家はやめてしまう、といった農家の人が多いのではないかと思われる。

**上野さんへのインタビュー(音声のまとめ)**

1. 原爆稲の特徴↓

・稲穂になるまでは通常の稲とは変わりがなく、稲穂のうち半分しか実にならない稲穂が混ざっているのが原爆稲。原爆稲全てが半分しか実にならないわけではなく、正常な穂と異常が出る穂の両方が出来る。異常が出た穂の種を使って継承していく。

・稲穂になると見た目でも原爆稲とほかの稲の違いは明らかである。実が入っていない所は青色であり、通常の稲穂では実の重さで稲穂が垂れるが、半分しか実がならない原爆稲は直立してしまう。

・原爆稲も含め、品種が定かではない稲は「雑米」として集められ、せんべいなどの加工品となって出荷されていく。

1. 上野さんは原爆稲を茨城にある「ジーンバンク」へ届けた。「ジーンバンク」では世界の種を集めており、たくさんの稲の種を集めている。稲の研究が進められている施設のようである。
2. TPPについて、上野さん、いしばさんの意見↓

・本当の裏側が見えないなどといった意見もあるように、まだ情報がきちんと伝わっていない問題がある。そのため農家もTPPについてはただ憶測で話すしかない。

・TPPをすれば現在ごはん１杯(140グラムがご飯１杯)100円なのが10円になってしまう。機械を大型にして生産効率を高めるという話もあるが、その機械を大型機械にすることで利益を得るのは機械を生産している企業であり、農家の人々ではない。TPPに参加していない今でさえも兼業農家でないとやっていけない(百姓だけで生計を立てているのは、上三川では10戸／100戸ほど。にら・イチゴ・かんぴょうなど野菜を育てている家が多い)。そのため、TPPをするならば農家の人々は自分たちのためだけ作物を作り、他は勝手にしてくれと思うのではないか。

・果実などの園芸農家は、検疫などの問題で輸出は困難とされている。例えば検疫の問題上、たまねぎは輸出出来てもでもじゃがいもは輸出できない(土がついているため)などの問題が現段階でもある。原爆稲も去年アメリカへ持っていくという話があったが、検疫の問題で持っていくことが出来なかったようである。

1. かつての農業と今のものとでは形が違う。かつては今の様に整備された田んぼではなかったが、40年前から整備が進み、稲作りの作り方もそれに伴い変化していった(その整備のおかげで便利になり仕事がしやすくなった一方で、稲を効率よく育てる以外の面白みがなくなったようである。川で魚釣りなども昔は出来たが、現在ではその逆で、様々な区画整備によって他の自然への影響が出ていると上野さんは考えている[[2]](#footnote-2))。  
   　そうした変化とはまた異なり、現在では老後に農業を考える人に加えて若者が農業に関心を持っているなどの変化がみられる。例えば、上野さんが最近参加した話し合いには、若い人が参加するように(子育ての人とか)なった。これもTPPの影響かと上野さんは考えているようだ。
2. 季節によって食物は役割がある[[3]](#footnote-3)ように、自然の流れの中に食べ物はあり、それを食べる私たちも本来は自然の流れにあるものである。しかし、現在ではスーパーへ行けば旬とは関係なしにいつでもどんな食べ物でも買うことが出来る。そのため、人々はいつがどの食べ物の旬なのかが分からなくなってきている。農家へと嫁いでくる人でさえもわからない。自分で育てたことがある人でないと旬を理解していないのが現状である。

(例えば夏に旬を迎えるトマトを冬に出荷できるようになると高く売れるため、農家の人はそうした栽培をするようである。)

1. 上野さんの農業の特徴↓

・上野さんは一人で大きな田んぼを経営している。今回上野さんと同様に私たちに協力してくれたいしばさんは、上野さんの友人であり、農作業を手伝い合うようである。

・上野さんは一時冬にトマトなどを栽培する「儲かる農業」をしていた。しかし、オイルショックによってトマトが高く売れなくなり、維持費がかかるため園芸農業を停止。その後の試行錯誤があった後に現在の「無農薬」農業があるそうだ。

・上野さんは「無農薬」農業を25年続けている。無農薬をつづけるために上野さんは多くの工夫を行なっている。例えば、毎年同じように耕していると毎年同じ雑草が生えてしまうため、何年かに一度の周期で田んぼに変化(マメ科の種を植えてみたり、耕すことをせずに放置してみたり)を与えることで、雑草が生えないように土地に変化を与えている。雑草を生やさないための工夫に加え、そこで使用したマメ科の種をそのまま肥料にしているのも工夫の一つである。栃木の土地では虫や病気よりも雑草が大変であるため、雑草をいかにしてはやさないかが問題のようである。

・その他の工夫としては、魚が田んぼに入れるように田んぼへの魚道を作ったり、縦に根をはる稲が育ちやすくなうようにビール麦を植えて緑被にした後、土と混ぜて肥料にしたり、川とつながっていない林を切り崩して作った田んぼの場合は地下水をひき、冬でも水をはっておくことで稲が育ちやすい田んぼにしたりしている。

こうした様々な工夫をしている上野さんであるが、こうして様々な工夫をする農家の方は少ないようである。工夫をするというのは試行錯誤の連続であり、苦労も絶えないはずであるが、上野さんは工夫をこらすことで一枚一枚違う田んぼを育てていくことが楽しいそうだ。

1. 原爆稲を広めるにあたって(上野さんが思うこと)↓

・原爆稲は九州の稲であることから、仙台より北では育たないかもしれないと上野さんは考える。関東甲信越でも長野など寒い地域では困難な可能性も。また、高地など気温が下がるところでも困難だと考えられる。以上のように、コシヒカリの品種が育たないところ（ささにしき・ひとめぼれなどを育てているところ）では困難が予想される。海外でも同じ。

・原爆稲育成は、現状は年間に10人ほどで関われば良い方。ただ、１穂２穂ぐらい持ち帰り、自分の地域に合う米か、どうゆう米なのか観察し、知った上で広げるのが原爆稲の意味である。いっぱい作って食べるという意味ではなく、シンボルとして穂になる実の状態に意味があるのだ。

・上野さんとしては、全国に広めることに異存はないそうだ。広めていくことで原爆稲から1人1人がなにかを感じ、「原爆がダメだ」「平和が良い」などのなにか議論が起こることに意味があると考えているためだ。

・上野さんは原爆稲が持つ意味として、ⅰ放射能への警鐘、ⅱ戦争反対などの平和のシンボルⅲ正常の稲との育ちの違いから作物のありがたみを感じられる、の3つを考えている。

・学校で稲を育てるのは、いっぱい実らせるためではない。おいしかったでは、一時的な感慨になりそこで完結してしまい、考察に結びつかない。いろんなことに「気づく」ことに意味がある。結果的に枯れさせてもいい。失敗から思考し、学ぶ。稲を育てることはその契機となる。稲を育てていく中で、その過程から様々なことに気づき、自分たちなりに考え、行動していくことが大切である。最終的に稲を通し、農業に興味を持ってくれればもっといい。また、稲を育てたことが、その場で深い気づきに繋がらなくてもいいと上野さんは考える。経験として持っていれば、後々に気づき考察していくきっかけになると考えているからだ。

・長期的に稲を育てるのが本当は望ましい。上の学年から教わって育てたりすると、縦のつながりも出来ていい。また、泥に汚れてやるのが、本当は肝要。可能ならば田んぼが学校にあるといい。

1. 交配の手法…オスを熱湯(60度程度)で5分ほどつけて精子を殺し、めしべは半分切って花が咲かないようにする [↑](#footnote-ref-1)
2. 川の整備によって井戸の水(地下水)がなくなってしまった、田んぼに毎年来ていたハクチョウが来なくなってしまったなど、科学的根拠はないが変化があるのは事実である。 [↑](#footnote-ref-2)
3. 春の野菜は体内の毒素を出すために、菜の花など苦味があるのである。 [↑](#footnote-ref-3)